

山口県西辺島嶼の方言の発音

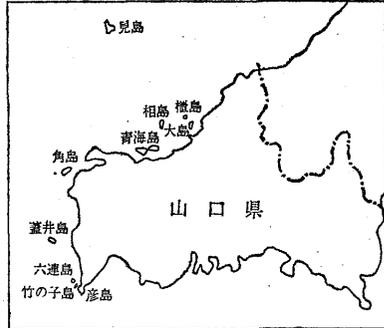
— 語音上の音変化について —

岡野 信子

はじめに

山口県西辺島嶼の方言の発音の、忠実な記述と考察とを期したい。

山口県西辺地域は、山陰路の果てるところであり、九州路に連なるところである。本土域は、山陽路からの新化の波を受けることがかなり早かったが、島嶼域には、山



陰九州のはざまの地の方言の特色が、音声面にも見られるかと予想される。西辺島嶼は、萩市の見島（ミシマ）・相島（アイシマ）・樫島（ヒツジマ）・大島（オーシマ）・長門市青海島（オーミシマ）・豊浦郡豊北町角島（ツノシマ），下関市の蓋井島（フタオイジマ）・六連島（ムツレジマ）・竹の子島（タケノゴジマ）・彦島（ヒコシマ）の島々である。本稿では、樫島・竹の子島・彦島を除く七島の方言を採りあげた。資料とするものは、昭和45年から昭和52年までの自然傍受法調査によって得たものである。したがって方言事象をあげた後に記した島名または集落名は、そこで得られたことを表わすもので、「他の島では言わない」ことは表わしていない。これまでの調査では、老・中年者の話を聞くことが多かったので、ここに報告するのは、主として老中年者のことばに認められる音変化事実である。

本稿では、語音上の音変化を、交替・脱落・融合・添加・同化の順に採りあげる予定であった。が、実際には、交替・脱落・融合の記述に、与えられた紙数を費してしまった。添加と同化については、次稿で連語音上の音変化とともに記述したい。

以下の記述中に、青海（オーミ）・大泊（オートマリ）・通（カヨイ）とあるのは、いずれも青海島の集落名である。

I 交 替

共通語音とは異なる語音のものの中に、ある単音又は音節が、本来のものと交替し

ていると認められるものがある。

1 母音交替

(1) Co > Cu

・イマ アーター ジブンノ ウチノ クエサエモ ステマス。今はあなた、(よそのこやしを取るどころか)自分の家のこやしさえも捨てます。〈相島〉

この文中の「クエ」は共通語音ならば「コエ(肥料)」で、共通語の※「コ」の所に「ク」が見えている。このようにオ段音をウ段音に替えたものは、どの島でも聞かれるが、相島でもっとも著しくて、次のようなものがあった。

※カナ表記で音声を表わし得るものについては、なるべくカナを用いる。また音韻表記においては、//を略している。

クエ(こえ—肥料)・オーツグム(おおつごもり)・ノズキ(のぞき芝居)・ヨムギ(蓬)・ス(そ—文末詞)・ヨークソ(ようこそ)・クラレマス(来られます)・グダイマス(ございます)・アスブ(遊ぶ)・カズエル(数える)・ワルータ(笑った)・カルテ(背負って)・ヌブ・ヌベル(延ぶ・延べる)

他の六島では、動詞や居体言にこの音交替が認められる。また代名詞の「アスコ(あそこ)」と文末詞「ス」とは他の諸島でもよく言う。また副詞のヤッブリ(ヤッポリ)、接続詞のフナー(ホンナラ)・フナ、感動詞のフント(ほんとう)も、次のようにあらわれる。

・ヤッブリ ナンデ ゴザイマショー。カドナワ チョット アリマスマー。やはりなんでございましょう。屋号はちょっとありますまい。〈大泊〉

・フナー オドマ ネセテモラオー カイノー。そんなら私は寝させてもらおうかねえ。〈角島〉

・フナ コラ マニアウ。そんならこれは出帆に間にあう。〈蓋井島〉

・フント エ。そうかい。〈六連島〉

ここにあげた語は、ときには共通語音で発音されることもあるが、老・中年者のことばには、オ母音をウ母音に替えて言うことは、かなり著しい。この傾向は長門沿岸域の発音にも認められる。ところでCo>Cuの発音現象は、九州の方言音声に特に顕著である。山口県西辺島嶼域のCo>Cuの傾向は、九州方言音との近さを思わせる。

オ母音をウ母音に替えて言うことは、狭母音化である。狭母音化は以下のようにも表われる。

(2) Ca > Co, Ca > Cu

ア段音をウ段音に替えた語は、オ段音をウ段音に替えたものほどには得られていないが、次のものを、見島以外の諸島で聞いた。

ナ^マイ^ドー (ナ^マイ^ダ——相島における1月15日の数珠繰りの行事)・ア^オビ (あわび)・サ^オグ (さわぐ)・ヤ^オイ (やわい——柔かい)・タ^ゴワ^カス (たがわかす)・ナ^ロイ^ヨッタ (ならいよった)・ナ^ロン^デ (ならんで)・ヤ^ッポ^リ (やっぱり)

「ナ^マイ^ドー」は相島だけで聞いたものである。Ca>Co の発音は、相島と蓋井島で比較的好く聞く。

Ca>Cu のものとしては、角島でス^ッパ^リ (さっぱり) を聞いた。

Co>Cu, Ca>Co, Ca>Cu の発音現象は、いずれも狭母音化のものであり、かついずれも、本来の発音よりは両唇を丸めて突出す発音傾向のものである。

(3) Ci > Cu

イ段音のウ段音化は、舌の位置が後に下ったものであるが、ここにも両唇を丸めて突出す発音傾向が認められる。

カ^ムゲ (髪毛) <相島>・ワ^ルキ (割木——薪) <青海島>・ア^ツツ (あっち) <蓋井島>・キ^レズ^ク (きれい好き) <相島・蓋井島>・タ^ベヌ^クイ (食べにくい) <角島><蓋井島>

(4) e > i ([re] > [e] > [i])

「オ^イ (俺)」は [ore] > [oe] > [oi] と変化したものである。e > i の交替とともに [r] 子音の脱落も認められるが、今は e > i の交替に注目して、ここで採りあげた。この音変化は、[re] の前接母音が [a] 又は [o] である代名詞と接続詞とに起こる。

オ^イ (俺)・ワ^イ (われ——二人称)・ダ^イ (誰)・コ^イ (これ)・ソ^イ (それ)・ア^イ (あれ)・ホ^イカラ^ー (それから)・ホ^イジャ (それじゃあ)

これらは見島で聞いたものであるが、相島・蓋井島のばあいもほぼ同じである。(アクセントは異なるものがある) 相島では少女からもこの類の発音を聞いた。蓋井島の人々の中には、応答詞の「ホ^イ」は「それ」の変化した発音であると意識している人もあって、次のように言った。

。「ソ^レカ ネー。」ツー コ^トデモ 「ホ^イ カネー。」ツー。「それかね(そう

かね。)』ということでも、「ホイ カネー。」と言う。

青海島や六連島では、代名詞の「ダイ」「ソイ」などは聞いていないが、接続詞の「ホイカラ (それから)」や「ホイヤケ」はたびたび聞いた。もっとも相島では[hoi]は[he:] [he]と変化して、ヘーカラ・ヘチラなどとなる。蓋井島では「ヒナ (それなら)」とも言うが、これは[he] > [çi]と替ったのであろうか。とすれば、さらにe > iの交替がここにある。蓋井島ではまた、尊敬助動詞「ナル」の連用形が「た」に続く時は「ナイタ」ともなる。

・ハー ミンナ シンナイタ ガナー。もうみな死なれたがねえ。

[re] > [e] > [i]の音変化は九州西部域で盛んで、*隠岐にもある。この現象も狭母音化傾向を見せている。

※神部宏泰氏「隠岐方言の発音—注意すべき音変化について—」<佐賀大学教育学部「研究論文集」第23集 P.119>

(5) Ci > Ce, Ce > Ci

i段音がe段音に替るのは、上述の狭母音化とは矛盾するが、この現象も下記のようにいくらか見られる。

ヘシモチ (菱餅)・サベシテ (さびしくて) <相島>、タカレ (たかり—かもめの群) <青海>、ヨセモ (吉母—地名)・エレル (入れる)・イメル (いみる—ふえる) <蓋井島> オーケニ ナル (大きくなる) <青海>、オレタ (降りた) <六連島> (オレタは上一段を下一段に転じたものかもしれない)

一方、「ハイノカゼ (はえの風—南風)」<六連島>や、「カイッタ (帰った)」<通その他>のように、[e]が[i]に替ったものも、まれに聞くことがある。

[i]と[e]とは、助詞「に」と「へ」のばあいには、ことに曖昧である。いったいに西辺島嶼では、共通語では「へ」助詞であるところにも「に」を用いる。(これも九州的である。)そして「に」はn子音を落して、「ソコイ イクソジャ (そこに行くのだ)」<相島>のように、「イ」となることが多い。ところが当然「に」であるべきところに、「エ」を聞くことがある。

・コレエモ ダイブ ジューネンバカリ ウエマシタ。これにも—私の家でも—
だいたい10年ばかり煙草を植えました。<相島>

「コレエモ」の「エ」は、「ニ」>「イ」>「エ」と変化したものである。

・コタツエ ヒオ イレサイ ノ。こたつに火をお入れよ。<見島>

一方に、「コタツイ」の言いかたもあるので、「コタツエ」は「コタツイ」の転じたものと思える。とすれば、 $e > i$ は、前接母音の広狭にかかわりなく起こると認められる。

ところで [i] が [e] 又は [ė] になることは、[a] [o] の後でかくべつ顯著である。前接広母音にひかれたものであろう。

タエ(鯛)・ダエガッコ(大学校)・ナランダエメ(何代目)・ヒトエ(ひと日)・アカエ(赤い)・ハエル(入る)

これらは青海島で得たものであるが、他の島々にも同様の例が多い。このばあいの「エ」は、[i] と [e] との中間音のように聞こえることが、もっとも多い。

先のヘシモチ(菱餅)のたぐいや、助詞「エ(に)」は、[ai] [oi] 連母音同化途上の [ė]・[ė] とはちがって、前接母音の広狭に左右されるものではない。ただし、連母音同化途上の [ė]・[ė] を一契機として、先のような $Ci > Ce$ も起り得たのかもしれない。いずれにしても、土地人の [i] と [e] との区別はかなりあいまいで、イメルカイメルかと、自ら迷うなどのこともあった。

「エ」と「イ」とのまぎれは、一般に山陰方言について言われている。隠岐方言における Ci 音の Ce 音化・ Ce 音の Ci 音化については、神部宏泰氏の「隠岐方言の発音——注意すべき音変化について——」にくわしい。長門西辺島嶼の $Ce > Ci$ も、その類の痕跡的なものと推察されるが、今はまだそれを明らかにし得ていない。

(6) その他の母音交替

以下にあげるものは、特定の語に認められた母音交替である。これらも共通語音で発音されることもある。

モツレ(むつれ) <六連島>・クチビロ(唇) <蓋井島>・ショモ(所務——収獲) <見島>には、 $u > o$ が認められる。どの島でも聞く「ヨーカタ(夕方)」は「夜」の意識がこの発音を導いたのかもしれない。相島ではミチタカ(ミチの家)などの、「タカ」は「宅」であると老人から聞いたが、その教示に従えば、 $u > a$ がここにある。

ヤシャク(夜食) <見島>・オチャナコ(お茶の子さいさい) <相島>・ヤリタモナー(やりともない——やりたくない) <六連島>には $o > a$ が見えている。西辺島嶼にかぎらず、山口県一円で「隅」を「ヌマ」と言う。これは出雲・石見と同様であるが、ここには $i > a$ が認められる。相島では「ゆっくり」も「ユックラ」と言った。これらはすべて広母音化のものである。

一方、ミシロ（蓆）・シタル（すたる——紛失する）＜青海島・蓋井島＞にはu>iが認められ、このばあいは後舌から前舌へと移っている。（セル——する——は、u>eの音変化ではなくて、サ変動詞の下一段化という形態論上のことであろうか。）

2 子音交替

(1) sV > dV

・ゲンダイ アリマスケ ネー。現在ありますからねえ。＜六連島＞
・デンガ ゴッポ イルゲー。お金がたくさんいるから。＜蓋井島＞
・シンドクガ フンタ、イオーテ フンタ、親族がねえ、祝ってねえ。＜相島＞
ゲンダイ（現在）・デニ（銭）・シンドク（親族）のように、ザ・ゼ・ゾをダ・デ・ドに言うことは、山口県西部域におけるもっとも顕著な音変化である。

ダイゴシ（在郷衆——農家の人）・ヒダ（膝）・サダエ（さざえ）・デドメ（出初め）・カデ（風）・ドーセンカ（造船科）・シンドー（心臓）＜見島＞

このような発音はどの島においても盛んで、青少年にも聞かれる。ただし、ザ・ゼ・ゾのままに発音されることもある。

(2) sV > hV

共通語音のサ・セ・ソをハ・ヘ・ホに言うことは、当域ではさして優勢ではない。これらの中では、ソがホに替るものももっともよく聞かれるが、これも指示の「ソ」を含む語と、文末詞のホ（そ）とに限られる。

・ウチノ ジーサン ホッチー ヤロー カナ。うちのおじいさんを、そっちに行かせようかね。＜蓋井島＞

・ホイ カネー。そうかねえ。＜蓋井島＞

蓋井島では、このほか「ホンナ コター（そんなことは）」・「ホン トキワ（その時は）」・「ホイナラ（それなら）」などと、代名詞・連体詞・接続詞の中の「そ」をホに言うことが、盛んである。他の島嶼では文末詞ホと、「そ」系接続詞（ホイテ・ホヤケ等々）とを聞くが、代名詞・連体詞には聞かない。

セ>へは、否定の「せん（しない）」がヘンとなったものを、どの島でも聞く。

・ヒトツモ カワラヘン。少しも変らない。＜通＞

「さ」がハとなることはまれである。蓋井島で「ハーテ キョーワ ドコ イクカー（さあて今日はどこに漁に行くか）」と、「さて」に相当する「ハーテ」を聞き

たが、これも一例にとどまる。六連島では「ダシナハイ (出しなさい)」・「ミナハイ (見なさい)」のように、ナサルから転じたナハルを聞く。

(3) $\text{ʃ} > \text{ç}$

ヒタ (下)・ヒチ (七)・アヒタ (明日)・ヒク (敷く)・ヒッチョル (知っている)などを、どの島でも聞く。見島では「ヒチョリマス (しています)」を、青海では「ヒカラレヨリマシタ (叱られたものでした)」なども聞いた。共通語のシ音に対応するヒ音を聞くことは多いが、シがヒにならない語も多い。たとえば「島」をヒマ、「美しい」をウツクヒーなどと聞くことはない。現在までに得られている語例では、 $[\text{ʃ}] > [\text{ç}]$ の交替は、 $[\text{k}]$ と $[\text{t}]$ との前で起こっている。

(4) $\text{ç} > \text{ʃ}$

シ>ヒの交替とは逆に、ヒをシに替えるのは相島だけである。

シ (火)・オシサマ (お日様)・ウシノシ (丑の日)・シキ (ひき—蛙)・シコク (被告)・シガシ (東)・シガンバナ (彼岸花)・シダリ (左)・シリョー (肥料)・シューババー (ひいばば)・ゼシ (ぜび)

「被告」のように、文字ことばと思えるものにも、ヒ>シの交替が見られる。相島でもヒーラドシノヨ (しいら年の夜—一月六日夜)やヒッチョル (知っている)を聞くが、ヒ>シは、シ>ヒよりははるかに優勢である。シ>ヒの交替を誤りと意識して、誤った回帰をおこなったかとも思えるが、それにしてはあまりに優勢である。

(5) サ>シャ、ザ>ジャ、ゾ>ジョ、チュ>ツ

イキシヤイ (行きさい) <相島・大島・青海>やタンジャク (短冊) <見島>・タンジャク <相島・大島・青海>を、老年者から聞くことがある。ショーリ (草履) <全島>は、上記のものよりは広い年層に聞かれる。これらにはいわゆる拗音化のきこえがある。

一方、六連島や蓋井島でチュー (という) をツーと言うのは、直音化である。これは若い人々からも下例のように聞く。

・ミナミカゼオ ハエノカゼツ ナ。南風をハエノカゼと言うね。<六連島>

(6) $dV > rV$, $rV > dV$

ウチラチ (うちだち—私たち) <蓋井島・青海島の通>・レンチャン (伝ちゃん) <六連島>・オロマ (おどま—自称) <青海島>では、ダ・デ・ドがラ・レ・ロと

交替している。この交替は、老年者のことばにまれに聞かれる程度である。相島では、かって窓をデンジと言ったと古者は語ったが、これは「れんじ窓」であろう。デ>レの交替とは逆に、レがデに替っている。同じく相島で聞く「ダチアケタ（運がよかった）」のダチは「らち」であろう。ダ・デ・ドとラ・レ・ロとの交替も、わずかな語の上に見られるばかりである。

(7) mV > bV, bV > mV

この現象は鼻音と破裂音との交替によっておこる。当域ではサバイ（寒い）・セバーエ又はセバー（狭い）・ケブリ（煙）・ダイム（大分）を、老・中年者からときに聞く程度である。

(8) 無声音と有声音

ゴマ（コマ—玩具）・ゴーズイ（洪水）・ゴータンエ（降誕会）・ガンオケ（棺桶）などを、どの島でも老人から聞く。これらは無声音 [k] が有声音 [g] に移ったもので、いわゆる濁音化である。ゴットイ（特牛）も、見島ではゴットイ、相島ではゴツェイと聞くこともあった。また見島と角島との老人のことばでは、「仔牛」「種牛」などのシがツに近く聞こえることがある。ただし土地人の意識の上ではシで、調査者の再現する「コウジ」の発音を否定する。シ>ジとジ>シとは、九州の筑後地域でよく聞くものである。

一方、見島の老人は、「先祖」をセンソと発音する。これはゾ>ソと、有声音の無声音化である。無声音と有声音との交替も、特定の語に固定している。さして優勢ではない。

(9) 相島の「ワ」音

相島では、ワがワとバの中間音のように聞こえることがあった。一般のワの発音よりは両唇ををさらに近づけて発音する。その音声を [β] が表わし得るかどうか不安であるので、今は「ワ」と記しておく。

・ヴァター スルナ イヤ。むちゃんことをするなよ。

これは老人男子のことばであるが、少女からも「ワイカタン ニンゲン オル カ。（お前の家の者はいるか。）」と聞くことがあった。ワイ（われ）・ワラ（藁）・ワカメ（わかめ）・ワルサ（わるさ）・ワヤク・ワカイ モン（若い者）・ワヤー（わやあ—文末詞）などを聞いている。ワヤーは、「メーメー セン バヤー（私自身は

しないよ。）」のように、バヤと聞こえることもあった。

もっともこのワは不安定な音で、ワと発音したそのすぐ後に、ワと発音されることもある。ある中年女性は、夫にむかって「ワイ アレグライノ コト メーメーニ セヤーレ ノ (お前さん、それぐらいのことを、自分でしなさいよ。)」と言うと教示した。そしてそれに続けて、「ワタシラーガ ユー ネー (私どもがこう言うねえ。)」と語った。ワイとワタシラーとが、続けざまに出ている。また昭和48年にこの島を訪れた時には、この発音がかなり耳についたが、昭和50年の調査カードには、ごくまれにしか記していない。私自身の「耳なれ」のためでもあるが、この島の発音が、共通語音のそれに近くなっているのかもしれない。

ワをウのように言うのは、さきのo > uなどとともに、唇音性のいっそう強まったものと考えられる。長門西辺島嶼は、一般にo > uの傾向を見せるのであるが、ワのばあいは逆にアと発音されがちである。その中にあって、相島はワもウと発音して、唇音性の強さを見せている。もっとも蓋井島および下関市北部と豊浦郡南部沿岸域との*漁業集落には、文末詞ワヤに相当するバヤがある。上に述べたように、相島でも文末詞ワヤがバヤに聞こえることがあった。

※下関市の安岡 (ヤスオカ) ・吉見 (ヨシミ) や、豊浦郡の小串 (コグシ) などで「アメガ フルゴト デル バヤ (雨が降りそうだよ。)」と言う。ただし、老年人から聞く程度である。

文末詞バヤは九州のバイを思わせる。相島のワ音もこれに連なるものであろう。唇音性の強さにおいても、長門西辺島嶼は、九州的な発音の、その痕跡的なものを見ている。

3 音 節 交 替

(1) イ > ユ, ユ > イ

見島では語頭の「イ」が「ユ」と交替して、ユワイ (祝) ・ユハイ (位牌) ・ユワ ミノカミ (石見守) となる。土地人の中には、この音交替を自覚していて、「ダイ タイ イ イ デ スケ ド ネ。 ココ ワ ユ ワイ (本来はイですけどね。見島ではユ ワイです。)」などと言う人もある。「いろり」をユルリやユルイのように言うことは、どの島にもある。

一方、弓をイミ <角島>と言うのは、「ユ」が「イ」と交替している。訪問辞の「オイ ロシ (お許し——ご免ください。)」 <青海島>でも同様である。ところで形容詞のエカ ロー ・ エカ ッタのばあいは、終止形エーにひかれて、各活用形の語幹部の単

純化が起こったと見るべきであろう。

(2) その他の音節交替

「ス」>「シ」のものに、ヌシト(盗人)・アシコ(あそこ>あすこ)がある。ヒタル(紛失する)では、「ス」>「シ」>「ヒ」と交替している。これらはどの島でも言う。マ行音とバ行音の交替したものにはカミチヨロ(壁ちよろ——とかげ)〈相島〉・ダイメン(大分)〈全島〉・ヘイケノマブリガミ(平家の守り神)〈相島〉がある。このほかショケン(世間)〈見島〉・ケネン(去年)〈相島・大島〉・テンズク(天竺豆——そら豆)〈見島〉・ショーギ(流儀)〈六連島〉・メンメン(めいめい)〈全島〉・ホツテ(そして>ほいて)〈見島〉などを聞いた。

交替現象はほぼ以上のように認められる。これらのうちでもっとも顕著なものは [Co] > [Cu], [zV] > [dV], そして [re] > ([e]) > [i] の交替である。また相島には他島に見られない [ç] > [ʃ] の交替がさかんである。

Ⅱ 脱 落

共通語音と比較して、単音や音節の脱落の認められるものを以下にとりあげる。

1 母 音 の 脱 落

母音の脱落はラ・ナ・マ行音節に認められ、撥音化現象としてあらわれる。

(1) ラ行音節における母音の脱落

「レ」・「リ」・「ル」がナ行音の前で撥音となったものがある。これらは母音が落ちて [r] 子音が後接鼻音にひかれて撥音化したのであろう。

・コンニ イーマス ラー。この人が言いますよ。〈見島〉

・アンニ アリマス。あそこにあります。〈相島〉

コンニ・アンニは、六連島以外の島々で聞かれる。「コンナ オーバーチャン(このおばあちゃん)」〈蓋井島〉のコンナは、「これなる」で、ここでも「レ」が撥音化している。このように一般にはナ行音の前で撥音化するが、相島では「アンガ エー(あれがよい)」も聞いた。このばあいは、[g]の前で撥音化している。「レ」が「ン」となるのは、このように指示語の中であるが、六連島では「クンナイ(呉れない——下さい)」を言う。

・コトシドマ カワツテ クンナイ エ。今年ぐらひは替っておくれよ。〈六連島〉
つきに「リ」が名詞の中で撥音としてあらわれたものに「トシノス(鳥の巣——わ

ら製の背負い籠)」がある。ただしこれはトノスとなることが多い。蓋井島では「モッチョナル (持っておられる)」・「オドンナル (踊りなされる)」のように、尊敬助動詞のナルの前で、動詞連用形語尾「リ」が撥音になる。

「ル」が撥音となるのは、動詞の終止形が禁止のナに続く時である。

・パーチャン イヌンナ ヨ。おばあさん帰るなよ。〈相島〉

・アー ユー コトダキヤー センナ ヨ。ああいうことだけはするなよ。〈六連島〉

蓋井島では「ユーテ クレンナ (言ってくれるな。)」などとも言う。「ル」が「ン」になることは、蓋井島・六連島でことに多い。

(2) ナ・マ行音節における母音の脱落

「ノ」・「ニ」・「ヌ」・「ナ」・「モ」・「ミ」は、末尾母音を落として撥音化することがある。撥音化のもっとも著しいのは、助詞「の」で、全島嶼で「オトコン コ (男の子)」ソントキ (その時)」のように言う。また名詞の中では「ワカイモン ガシラ (若い者頭)」キモン (着物)」のように、「者」「物」が撥音化する。文末詞のばあいは、「イツ イッテ ン (いつ行かれるの。)」〈角島〉のように、格助詞から転成したものは撥音化するが、原生文末詞の「ノ」は撥音化しない。

ニ・ヌ・ナの撥音化は、ごく限られたものにだけ認められる。ヒンチ (日にち) ・イチンチ (一日) では「ニ」が撥音化している。老人の訪問辞の「アンタンデ ゴザ イマス (在宅ですか。)」〈青海島〉のアンタンは、「アンタニ」ではあるまいか。助詞「ニ」が撥音化するの、このばあいに限られるようである。また「オイデンサレ マシタ (いらっしゃいました)」などの「ンサレマシタ」は「ナサレマシタ」である。「ナ」の撥音化も尊敬助動詞「ナサル」に起こるだけのようである。「ヌ」の撥音化したものは、相島で「オンシ (お主—お前)」を聞いた。

ワタシドンやウチドンのように、ドモをドンと言うのは、角島と六連島である。

・ウチドンノ ゴター チイ ネ。あの家は私の家などのように(貧しく)はないよね。〈六連島〉

蓋井島では接続助詞「ソヤケドンガ (そうだけれどもが)」を中年男性から聞いた。また角島のカンベンジョ「上便所」では、「ミ」が「ン」となっている。

ナ行音・マ行音の撥音化は、九州ではきわめて著しい。山口県西辺島嶼のそれは、九州でさかんな撥音化の、薄くなった状況とみることができようか。

ラ・ナ・マ行音以外のものでは、「たずねる」の撥音化した「タンネル (探す)」

がある。これも「ズ」の母音が落ちて、[z]が後接鼻音にひかれたのであろう。(タシネルは瀬戸内海域でも広く用いている。)

2 子音の脱落

(1) [wa] > [a]

・ア^アチャー ア^アカラー セン。わけはわかりやしない。〈蓋井島〉

相島以外の島々の老人は、ア^アケ・ア^アカルのように、語頭「ワ」の[w]を落して[a]と言う。

ア^アシ(わし)・ア^アガ(わが—お前が)・ア^アカイシ(若い衆)・ア^アヤク(わやく—冗談)・ア^アタル(渡る)・アラウ(笑う)

このように、古者のばあいは語頭の「ワ」はほぼ例外なく「ア」となる。60代以下の人々のばあいは、これを「なまり」と意識していて、「ワ」に返して言う人が多い。

「ワ」>「ア」の発音には、唇音退化の傾向が認められる。ところで、先にはこの地域に顕著な[Co] > [Cu]の発音に、両唇を丸めて突出す—いわば唇音性の強まりが認められた。我々の発音生活は、このように相反する傾向を併存させて営まれてもいるのである。

(2) [re] < [e]

・ア^アエニ ユ^エーチャロー。あの子に言ってやろう。〈蓋井島〉

・ソ^ソエガ タ^エエガト^ーテ ヨ^ー ツカワ^ン ソ^エエナ。それが(ことばの悪いのが)気の毒で、とても使えないんですよ。(土地ことばを出せないんですよ)〈相島〉
蓋井島と相島とでは、指示語の「あれ」「それ」の[r]を落してア^アエ・ソ^エエと言う。(先に述べたように、ア^アイ・ソ^イともなる。)ソ^エエは文末詞としても現われ、また接続詞の中でも、ソ^エエデ(それで)・ソ^エエニ^ャー(それには)のように現われる。

尊敬助動詞のサ^レレルは、サ^エレルの語形の方がよく行なわれており、レ^ル・ラ^レル・ナル(ナ^レた)でも、レ^レはエと発音されることがある。六連島ではこれらを聞かない。

・シ^シマイサ^エタ カ^ー。しまわれましたか。(夜の訪問辞)〈相島〉

・ア^アンター ミ^チョラ^エタ カ^ナ。あなた見ておられましたか。〈蓋井島〉

・オ^オキ^ー デ^ナエ^タ。沖へ出られた。〈角島〉

また見島・相島・青海島・角島では、オ^オシ^ラエ^タ(仰せられた)お^オし^ラれた)もよく聞く。

(3) [r] 子音の脱落——長音化

蓋井島の老・中年者は、ダー（誰）・ナンナー（なりなる——なられる）のようにラ行音節を長音に言うことがある。これについては、「下関市蓋井島の方言—音声面の二・三の現象から—」（『国文学研究』第8号）に述べた。ここでは省略する。

(4) [ni] > [i]

どの島でも助詞「に」は、イと発音されることがきわめて多い。また副詞末尾のニも、イと発音されることがある。

・オモイ シンギク シンギク イーマス ガ。おもに春菊春菊と言いますが（ローマと言わずに）。<六連島>

助詞「に」は、ニのままに発音されることもあり、ニとイとがひきつづいて現れることもある。

・ココニ マダ ハントーノ イエガ アロー ガノ。アシコイ モラワレテョル。ここにまだ建築半ばの家があるだろう。あそこに嫁にもらわれている。<相島>

アシコイのばあいよりも、ココニの方に、いくらか強調意識があるうか。

(5) [ji] > [i]

見島では、サ行五段活用動詞の連用形が「て」・「た」に続く時に、[j] を落して ダイタ（出した）・コロイタ（殺した）のように言う。他の島々ではこの [i] は前接母音と同化しがちである。見島では助動詞「マス」にも、このいわゆるサ行イ音便が起こって、「ミマイタ（見ました）」のように言う。特定の語上のもとしては、六連島で ヒーテゴシ（ひしてごし——一日置き）を聞いた。

3 音節の脱落

(1) ラ行音節の脱落

見島ではラ行音節がしばしば落ちる。

・コニ ヨメサンガ モッタ ヨ。ここに家の嫁さんが帰ってきたよ。<見島>

コニは「これに」> コンニ > コニ と変化したものである。「ツニ ミエルデショー（そこに見えるでしょう）」などとも言う。また「コナ ワカメ（ここにあるわかめ）」や「ツナ イエ（その家）」の コナ・ツナ は、「これなる」「それなる」であろう。

「レ」と「ル」とが落ちている。接続助詞のホナは、ソレナラ>ソソナラ>ホソナラ>ホナラ>ホナと変化している。また「タグチナト（宅地なりと——宅地でも）」のナトでは、「なりと」の「り」が落ちている。オーツゴモ（おおつごもり——大みそか）やヤッポ（やっぱり）でも「り」が脱落している。

蓋井島におけるラ行音節の脱落については、「下関市蓋井島の方言—音声面の二・三の現象から—」で述べたので、ここには省略する。

その他の島々のことばでも、語中語末のラ行音節は脱落することがある。相島のトノスは語中の「り」を落とし、オーツグム（おおみそか）では語尾の「り」を落としている。「やっぱり」は、どの島でもヤッポあるいはヤッパとなることが多い。

・ナツニ ナッタナ アケヒッパッテ ヤスママス。夏になったら戸をあけひろげて寝ます。〈角島〉

ナッタナはナッタナラのラを落している。

・ツイデ アンス イノ。同じですよ。〈大泊〉

アンスはアリマスの「り」の落ちたものである。

ラ行音はさきに述べたように、「エ」「イ」ともなり、また撥音化し、長音化する。そしてここにとりあげたように音節を落とすこともある。ラ行音のこのような諸変化は※山陰と九州とに顕著である。

※藤原与一先生著『方言学』 P471~472

神部宏泰氏「隠岐方言の発音—注意すべき音変化について—」〈佐賀大学教育学部「研究論文集」第23集 P123〉

室山敏昭氏「山陰方言の音声学的研究」〈鳥取大学教育学部研究報告（人文科学）第21巻1号〉

(2) 促音の脱落

動詞「行く」「持つ」「取る」「参る」「はいる」の連用形が助詞「て」に続く時に（「行く」は「た」に続く時にも）、促音の落ちることがある。この現象はどの島の発音にも認められる。

・オーキーン モテ コイ ヤ。大きな袋を持って来いよ。〈六連島〉

・イチノヤマカラ ミナ マエテ イキマスケー。山の神の神事の時は、一の山から、（順次）全部の山に参って行きますから。〈蓋井島〉

・ヨソカラ ハイタ ヒト トコロニ ナレテ オリマセンカラ ネ。よそからこの島に入った人は、この土地になれていませんからね。〈相島〉

名詞上で促音の落ちたものとしては、「セキ（節季）」を見島で聞いた。

(3) 撥音の脱落

見島で聞く $\overline{\text{コニ}}$ （これに）・ $\overline{\text{ソニ}}$ （それに）・ $\overline{\text{コナ}}$ （これなる）・ $\overline{\text{ソナ}}$ （それなる）・ $\overline{\text{ホナ}}$ （それなら）は、ラ行音節を落としたものとして、すでにとりあげた。これらは、 $\overline{\text{コレニ}} > \overline{\text{コンニ}} > \overline{\text{コニ}}$ のように変化したものであるから、撥音を落としたものとも考えることもできる。

Ⅲ 融 合

語音上の連音節の融合することは、さして著しい現象ではないが、蓋井島・六連島で次のようなものが聞かれた。

$\overline{\text{カセル}}$ （食わせる）・ $\overline{\text{シューガエー}}$ （自由がよい——思いどおりになる）・ $\overline{\text{ジョーガナイ}}$ （しょうがない）

蓋井島内の地点名に、 $\overline{\text{ニシナキ}}$ （西の脇）・ $\overline{\text{ミヤナキ}}$ （宮の脇）・ $\overline{\text{ハカナキ}}$ （墓の脇）がある。これらは、 $\overline{\text{ミヤノワキ}} > \overline{\text{ミヤンワキ}} > \overline{\text{ミヤナキ}}$ のように変化したもので、連語音上の音変化とも見られるが、今は一語の固有名詞上の音変化とみて、ここに記した。

お わ り に

この稿にとりあげた音変化のうちで、西辺島嶼にもっとも著しいのは、「ザ」・「ゼ」・「ド」が「ダ」・「デ」・「ド」となる現象である。これは山口県の本土域においても著しい。島嶼域と本土域とが共通の発音傾向を見せることは、当然であろう。 $zV > dV$ の交替については、 $Co > Cu$ の交替と、ラ行音上の諸変化とが注目される。 $[o]$ 母音が $[u]$ 母音に替わることは、九州方言に顕著で、長門西辺島嶼の方言音は、この狭母音化において、九州方言音への近さを見せている。山陰地域では、 $Cu > Co$ の広母音化が顕著であるが、当域の広母音化は二・三の語に見られる程度のものである。狭母音化とともに、ナ行音・マ行音を撥音化すること、また助詞「に」は「に」と「へ」の両機能を有していて、「イ」と発音されることも、長門西辺島嶼の発音の、九州方言音との近さを示している。一方、ラ行音上の諸変化は九州の西がわにも中国地方の山陰がわにもよく見られるものである。両域のはざまの長門西辺島嶼域に、上述のようなラ行音上の諸変化が見られることも自然である。総じて山口県の方言には、「山陽新化」の傾向が見られるが、西辺島嶼域の新化は、当然のこと

ながら、本土域のそれよりは緩やかである。そのような事情から、長門西辺島嶼域の発音は、山陰九州的なものを、新化の底に残すこととなったのであろう。山陰と九州とのほさまの地における発音傾向は、後に「添加」「同化」と見進めていくにつれて、いっそう明らかになってくる。

さてここにとりあげた七島の発音傾向には、著しい差異は認められないが、相島がいくらか特異である。「ヒ」を「シ」に発音するのは、相島だけであった。また他の島々では老人が「ワ」を「ア」に言うことが著しいのに、相島では老・少を問わず「ワ」を「ヴ」（両唇をいっそう近づけた音）で言うことがあった。相島の発音上の特殊は、この島の孤島性の強さに依るのであろうか。相島の文末詞ワヤは、西九州のバイをすぐに思わせる。文末詞バヤは、蓋井島にもわずかながら聞かれる。蓋井島は相島とともに九州的な発音傾向をよく見せることで、他島にぬきん出ている。発音面ばかりでなく、表現法の上にも語彙の上にも、この島は西九州的なものをよく見せる。

個々の島の発音状況の比較は、次稿で語音上の添加・同化をとりあげ、また連語音上の音変化をも考察した後におこないたい。たとえば [ai] 連母音の同化では、青海島は順行同化を見せることの少ない点で、他島とやや異なる。また見島では同化音も聞かれるが、同化させない傾向の方がより強い。

長門西辺島嶼域の発音に見られる山陰九州的なものは、青少年層に受けつがれることはきわめて薄いようである。

この稿は、昭和51年7月に広島方言研究所ゼミナールで発表したものの一部を改稿したものである。このたびもまた藤原先生はじめ諸学兄のお教をたまわったことを深く感謝申上げる。